

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 塚本 聡

研究課題		英語史的コーパスを利用した言語変化の数量的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	コーパスデータでは直線的な増加となることが多いにもかかわらず、言語変化は一般に S 字状のカーブを示して変化するといわれている。この要因は、言語拡散を基礎とした言語変化では地理的な面積の変化が加味されるため指数的な変化となることをモデル化した。モデルの適応性を、コーパスデータを用いた検証することを目標とした。単に数量の変化のみならず、回帰分析を行うことで、客観的な性質を示すことを目標とした。
	研究の 結果	第1は、PPCEME, PPCMBE2 などの Penn Parsed Corpora of Historical English、ARCHER、CLMET 3.1、Early English Books Online (EBO)の史的コーパスを使用し、各レジスター（テキストタイプ、性別）における進行相、完了相の変化を観察した。変化の度合いを回帰分析した結果、完了相と進行相では、生起数の増加の度合いが相反する性質を示していた。回帰分析を行うことで、各レジスターの速度差を客観的に示すことが可能となった。 第2は、PPCME2 および PLAEME を使用し、フランス語源の語の生起数に関し、方言別の拡散度合いについて token, type の両面で観察した。総体としてみた場合には、S 字カーブを示すように見えるが、方言別で観察すると直線状の増加を示していることが明らかとなった。
	研究の 考察・ 反省	言語変化は口語レジスターから発生すると主張されることがあるが、第1の研究結果からは、相に関しては、その主張は成り立たないことが明らかとなった。変化の質が新規性を有するものか（進行相）、規範性を確立するものか（完了相）という性質に依存すると推定される。言語変化の速度は S 字状カーブを示すと一般に言われているが、第2の研究結果から必ずしも S 字状の増加ではなく、直線状の増加を示すことが明らかとなった。このことは言語変化の地理的拡大を考慮すると、直線状の増加でも面積拡大の影響から S 字状の増加となることの証左と考えられるものである。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>研究発表 日本大学英文学会 英語学シンポジウム 英語のアスペクトを歴史的に探る：進行形と完了形の発達をめぐって 「レジスターの違いで見える進行相、完了相の発達」 2024年10月26日 日本大学文理学部</p> <p>英語コーパス学会 コーパスと言語変異研究会 2024年度研究会 「PLAEME を活用したフランス語起源の動詞および接尾辞の変遷の調査」 2025年3月16日 沖縄県那覇市 みんなの会議室</p>	